

# よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



20

よろこびの知らせ  
第20集

目 次

福音による解放 .....	1
使徒 13:38-39	
生ける神に立ち返る .....	10
使徒 14:14-18	
証しされた福音 .....	19
使徒 15:1-2	
ひとりのために .....	28
使徒 15:36-41	

ここに収められたメッセージは、2021年4~5月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

## 福音による解放 使徒 13:38-39

13:38 ですから、兄弟たち。あなたがたに罪の赦しが宣べられているのはこの方によるということを、よく知っておいてください。

13:39 モーセの律法によっては解放されることのできなかつたすべての点について、信じる者はみな、この方によって、解放されるのです。

きょうは、パウロが、ピシデヤのアンテオケで語ったメッセージをとりあげます。それは使徒 13:16-41 にあって、三つに分けることができます。

### 一、旧約に預言されている福音（16-26 節）

最初のセクションは 16-26 節で、福音は、すでに旧約で預言され、約束されていたことが語られています。パウロは、そのメッセージを、「出エジプト」から始めました。「出エジプト」は、イスラエル民族に起こった出来事ですが、それは、全人類がイエス・キリストによって救われることの予告や雛形でした。イスラエルがエジプトで奴隷であったように、すべての人は罪の奴隷です。イスラエルの人々の代わりに過越の子羊がほふられたことによってイスラエルがエジプトの奴隷から解放されたように、イエスも神の子羊となって十字架で血を流し、信じる者を罪の奴隷から解放してくださったのです。

罪や悪習慣に浸っている人は、「止めようと思えばいつでも止められる」と言うのですが、実際は、自分で自分がしていることを止められないでいます。罪は、人を

奴隷にするのです。しかし、自分の罪を認め、そこからの救いを願い求めるなら、救い主イエスが私たちを罪の奴隷から解放してくださいます。

パウロの話は、出エジプト後のイスラエルの歩みからダビデに及びました。そして、23 節に「神は、このダビデの子孫から、約束に従って、イスラエルに救い主イエスをお送りになりました」と、イエスのことを語りました。イエスを「ダビデの子」として紹介しています。

聖書には同じ名前の人が幾人か登場しますが、「ダビデ」という名の方は、イスラエルの二代目の王、ダビデのほかありません。「ダビデ」という名には「愛された者」という意味があり、ダビデは、神に愛され、神を愛した特別な王でした。ダビデ以後、数多くの王が立てられました。その誰もが「ダビデのようであったか」、「ダビデのようではなかったか」で評価されているほどです。イエスもまた、神のひとり子として特別なお方でした。バプテスマのとき、天から「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」という声があったように、イエスは永遠の先から、神が愛しておられた神のひとり子でした。

ダビデは、王としての油注ぎを受けたあとも、先の王、サウルからしつこく命を狙われました。老いてからは、肉親や臣下に裏切られ、いったんは、王位を追われました。ダビデが受けた苦難は、イエスがお受けになった苦難の預言にもなっています。

それから、パウロはイエスが旧約が予言していた救い

主であるという、バプテスマのヨハネの証言について語りました。

ある人たちは、旧約はユダヤの人の物語で、ユダヤ人でない私たちには関係がないと言う人もいますが、決してそうではありません。聖書は旧約と新約の二つで成り立ちます。旧約がなければ、新約を正しく理解することができず、新約がなければ旧約も正しく解釈することができません。新約にも神が世界を創造されたことが書かれていますが、創世記や詩篇、その他のところには、神の創造のみわざが見事に描かれており、それによって私たちは、神が、全知全能のお方、唯一の生ける神であることを知ることができます。国際宇宙ステーションへの宇宙船が打ち上げられたとか、惑星探査機からデータが送られてきたなどのニュースを聞くたびに、この広大な宇宙を造られた神の栄光を思うことができます。また、小さな草花を見たり、小鳥のさえずりを聞く時も、神のいつくしみを思うのです。

また、イエスが宣べ伝えた「神の国」にしても、旧約時代に、神がイスラエルをご自分の民として選び、外敵から守り、豊かな収穫を与えてくださったことや、神殿を与え、そこでの礼拝を通して、神との交わりを与えてくださったことなど、目に見える具体的なもの、雛形があればこそ、本来のものがどんなものかを思い見るのできるのです。旧約は、神の存在やご性質、天の霊的なことを、地上の具体的な事柄を通して見せてくれているのです。

パウロは、次のセクションに入る前に、26節で、一区切り置いて、こう言いました。「兄弟の方々、アブラハムの子孫の方々、ならびに皆さんの中で神を恐れかしこむ方々。この救いのことばは、私たちに送られているのです。」「神を恐れかしこむ方々」とは、ユダヤ人でない人々のことです。旧約に預言され、約束され、準備されてきた「救いのことば」は、「アブラハムの子孫」、つまり、ユダヤの人々だけでなく、神を求め、信じ、敬う、あらゆる人のためのものだと言っています。ですから、旧約も私たちの聖書です。

私たち異邦人も、イスラエルの人々と同じように、神によってずっと以前から愛されており、救いにあずかるようにと、招かれていたのです。イエスはユダヤ人として生まれました。十字架と復活は、エルサレムで起こった出来事です。けれども、イエス・キリストによる救いは、イスラエルのためだけではなく、全人類のためのものでした。エレミヤ 31:3 に「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに誠実を尽くし続けた」という言葉があります。神が私たちを愛して、イエス・キリストによる救いをくださったのは、決して、神が、思いつきや気まぐれでなさったことではありません。神の永遠の愛がイエス・キリストによる救いをもたらし、神の忍耐深い愛が、全人類の救いを成就したのです。旧約の物語は、神の愛の物語です。

## 二、十字架と復活の福音（27-37節）

二番目のセクション、27-37節には、イエスの十字架と

復活が語られています。29 節に、「こうして、イエスについて書いてあることを全部成し終えて後、イエスを十字架から取り降ろして墓の中に納めました」とありますが、「イエスについて書いてあることを全部成し終えた」のは誰でしょう。イエスの反対者たちです。彼らは、イエスを亡き者にするために策略を巡らし、それを一つひとつ実行に移しました。彼らは、自分たちのしたことがうまくいったのを喜んだことでしょうか、実は、彼らの企みが成就するたびに、救いの計画も成就していったのです。イエスが十字架で息を引き取られたとき、悪が善に勝ったかのように見えました。しかし、実際は、神の義が罪に勝ち、神の愛が悪に勝ったのです。イエスはご自身の死によって、人類を罪と死から贖い出してくださったのです。

彼らはイエスを墓に閉じ込めました。しかし、誰もイエスを死者の世界に閉じ込めておくことはできません。イエスは復活し、私たちに永遠の命を与える救い主であることが、すべての人に向かって宣言されました。これが福音です。福音の中心は、イエス・キリストの十字架と復活です。十字架と復活が人を救います。その十字架と復活が「わたしのためであった」と信じ、受け入れる人が救われます。ローマ 10:9-10 に「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」とある通りです。

### 三、罪の赦しの福音（38-41 節）

パウロのメッセージの第三番目のセクションは 38-41 節です。ここで、パウロは、イエス・キリストによって私たちに「罪の赦し」が与えられると言っています。そして、この罪の赦しは、イエス・キリストを信じる信仰によって受けるのであって、「律法」によるのではないと言いました。パウロが「福音」と「律法」を比較しているのは、ユダヤの人々が、「律法」を大切にすぎるあまり、人は律法を守れば救われると考えていたからでした。

「律法」とは、神が人間に、正しく生きるためにお与えになったものです。一般の「法律」は、社会を営むうえで必要な人と人との関わりを定めたものですが、神が与えた「律法」には、たんに人と人の関係だけでなく、神と人との関係が定められています。「律法の中の律法」といえば、「十戒」ですが、それは、「～しなさい」「～してはいけない」というルールを定めただけのものではありません。十戒は、「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である」（出エジプト 20:2）との言葉で始まっており、これが大切です。神は、ご自分を「わたし」と呼び、イスラエルを「あなた」と呼んでいます。神とイスラエル、また広く言えば、神と人との関係、交わりが、そこで言われているのです。神が人に十戒をお与えになったのは、神と人とが、「わたし」と「あなた」という人格の関係で、さらに言えば「愛の関係」で結ばれ続けるた

めなのです。神はイスラエルに「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である」と言われましたが、これは、キリストを信じる者にも、そのまま語りかけられています。神は、イスラエルだけでなく、キリストを信じる者をも、罪の奴隷から解放してくださったからです。神は、キリストを信じる者の神となり、キリストを信じる者は神の民とされているのです。「わたしはあなたの神、あなたはわたしの民。」これが律法の出発点です。

ところが、ユダヤの人々は事細かな律法のシステムを作り、その律法のシステムを守ることによって、永遠の命を得、神の国に入ることができると教えていたのです。

しかし、私たちは、本当に、律法を落ち度なく守ることができるのでしょうか。律法が神との交わりに基づいている以上、それは、表面的に規則を守ることだけで終わらないはずです。心から神を畏れ、神の前にへりくだって悔い改めること、神の恵みを忘れず、それに感謝することなど、そこには、私たちの内面に関わることが要求されています。神の律法は、清く、正しく、純粹で、深いものです。私たちは、神の律法を聞いて、その素晴らしさを誉め、また、喜ぶのですが、では、自分がそれを実行できているかということ、決してそうではないことに気がきます。ユダヤの会堂では安息日に律法と預言者が朗読され、人々はそれをうやうやしく聞いていましたが、それだけでは、律法を守れなかった罪は、解

決されないのです。ユダヤ人も外国人も、律法が私たちの罪を示すことはあっても、罪を赦すことはできないことを感じていました。真剣に救いを求める人たちは、人の罪を責める「律法」ではなく、「あなたの罪は赦された」という「福音」を求めていたのです。パウロは38-39節で、こう言いました。「ですから、兄弟たち。あなたがたに罪の赦しが宣べられているのはこの方によるということ、よく知っておいてください。モーセの律法によっては解放されることのできなかつたすべての点について、信じる者はみな、この方によって、解放されるのです。」十字架と復活によって勝ち取られた「罪の赦し」をはっきり語っています。

「信じる者はみな、この方によって、解放される。」この「解放される」と訳されている言葉は、他では「義とされる」と訳されています。ここで「解放される」と訳されているのは、「義とされる」、つまり、神によって「正しい者」と認められ、神に受け入れていただき、「あなたの罪は赦された」と宣言していただくことは、最高、最大の「解放」だからです。恩赦を受けた者は、もう監獄にいる必要はありません。そこから解放されます。同じように、罪の赦しは、私たちが束縛してきた罪から、私たちを解放するのです。

もちろん、罪から解放されるといっても、勝手気ままにしてよいということではありません。「わたしはあなたの神、あなたはわたしの民」と言ってくださる神に、今度は、私たちが、「あなたは私の神、私はあなたの民

です」と告白し、神に近づくのです。赦しの恵みに感謝し、自由な心で、神に従うのです。それができるのは、福音により、罪の赦しを受けた人だけです。福音のメッセージが私たちに与える、この赦しの恵みを、今、イエス・キリストの御手から受け取ろうではありませんか。

(祈り)

「主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましょう。しかし、あなたが赦してくださるからこそ…」私たちは、自分の罪を知らながらも、それを悔い改めて、あなたのもとに近づきます。キリストの救いのゆえに、私たちに罪の赦しの言葉を与え、私たちのところに平安と解放を与えてください。主イエスのお名前です。

## 生ける神に立ち返る

使徒 14:14-18

14:14 これを聞いた使徒たち、バルナバとパウロは、衣を裂いて、群衆の中に駆け込み、叫びながら、

14:15 言った。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。

14:16 過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。

14:17 とはいえ、ご自身のことをあかししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくださいました。」

14:18 こう言って、ようやくのことで、群衆が彼らにいけにえをささげるのをやめさせた。

今回はパウロとバルナバがピシデヤのアンテオケで伝道したことを学びました。ふたりはこの後、次の町へと進んでいくのですが、この伝道旅行で、二つの困難に出遭っています。一つは「ユダヤ人からの迫害」、もうひとつは「異邦人の偶像礼拝」です。パウロとバルナバは、それらにどのように対処したのでしょうか。ふたりがしたことから、何を学ぶことができるのでしょうか。きょうは、そのことをご一緒に考えましょう。

### 一、ユダヤ人からの迫害

ピシデヤのアンテオケで、最初の安息日に語ったパウ

口のメッセージは多くの人に歓迎されました。人々は、次の安息日にも同じメッセージをしてくれるよう頼み、「次の安息日には、ほとんど町中の人々が、神のことばを聞きに集まって来た」ほどでした（使徒 13:44）。そして、多くの人々が信仰を持ちました（使徒 13:48）。ところが、すぐさまユダヤ人から妨害が起こりました。パウロとバルナバはやむなくイコニオムに向かいました。イコニオムでも「ユダヤ人もギリシャ人も大ぜいの人々が信仰に入った」のですが（使徒 14:1）、ここでもユダヤ人の反対に遭い、パウロとバルナバは、ここを追われることになりました（使徒 14:5-6）。

パウロとバルナバは、伝道旅行に出かける前、この町に行ったら、次はあの町にと計画を立てたことだろうと思います。ところが、計画通りに事は進みませんでした。もし、これが、一般の仕事であれば、パウロやバルナバは大変なフラストレーションに陥ったことでしょう。計画通りにいかなかったのですから、普通なら失敗したことになります。しかし、パウロとバルナバは失望したり、落胆したり、逃げ帰ったりしませんでした。これが、パウロやバルナバの働きではなく、神の働きであることを、知り、信じていたからでした。パウロとバルナバは、自分たちだけでこの伝道旅行に出かけたのではありません。神により、聖霊により、遣わされたのです（使徒 13:4）。この伝道旅行は、神ご自身が導かれたものです。そこでは、人が主人公ではなく、人は神に用いられる器です。ですから、たとえ自分の思い通りに事が

運ばなかったとしても、神のみわざが達成されたことを、ふたりは喜んだのです。

使徒 13:49 に「こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった」とあります。ピシデヤのアンテオケに主のみことばが広まったのは、パウロとバルナバがそれを宣べ伝え、教えたからでした。しかし、聖書は、それをパウロとバルナバの働きの成果としてではなく、神ご自身の働きとして描いています。もちろん、パウロ、バルナバのふたりは、自分たちの伝道が実を結んだことを喜び、感謝したことでしょう。しかし、ふたりがそれ以上に喜んだのは、自分たちが何事かを達成できたことではなく、主のみことばが広まったことだったのです。

一般の社会では、人々は、自分がやりたいと思うことを達成して満足することや、それを人に認めてもらうために努力します。「自己実現」と言われるものです。目標を持ち、それに向かって努力する姿は素晴らしいものですし、目標に近づいていくことを喜びとして励むことは良いことです。しかし、そこに、神を恐れる思いがなかったら、「自己実現」は、わがまま勝手な「自我の主張」で終わってしまいます。自分の目的を達成するために他の人を蹴落としたり、利用するとった醜いものが入り込んできます。そこでは、神から与えられた人生の目的を実現するという正しい生き方はできません。そこでは、自己実現が達成されたとしても、人生の本当の喜び、幸いを体験することはできません。神は、私たち一人ひとりを愛してくださる方です。この神を知り、神の

導きを求め、それに従って生きるとき、私たちは本当に幸せな生涯を送ることができます。

パウロやバルナバは、自分たちが信じる神が、どんなに信頼に足るお方であり、どんな苦難をも、最終的には善に変えてくださることを知っていました。ですから、伝道した先々で石で打たれ、追放されても、それを乗り越えて前進することができたのです。

私が日本にいたころ、子どもたちが暗誦聖句をするために、聖書の言葉の入ったカードを、サンデースクールで配っていました。その中のひとつに、ひとりの若者が、船の舵を動かす大きな操舵輪を握っている絵がありました。空は曇り、海は荒れています。この若者は、まだ進んだことのない航路を進んでいます。その顔は不安そうです。しかし、その絵には、背後にイエスが描かれています。イエスは若者の肩に手を置き、「恐れるな、私が共にいる」と語りかけ、そして、進むべき方向を指さしています。この若者は、イエスの導きによって、望む港に無事到着するでしょう。

私たちも、この絵に描かれているように、謙虚に神の導きを求める心、そして、神の導きに従う姿勢を持つなら、どんな困難があっても、それら乗り越えて進むことができます。パウロは言いました。「私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。」（テモテ第二 1:12）神は、私たちが信頼して、決して失望させられることのない

い、真実で、誠実な方です。神のために生き、神に導かれて生きる人生ほど幸いな人生はありません。

## 二、異邦人の偶像礼拝

さて、イコニオムを追われたパウロとバルナバは「ルカオニヤの町であるルステラ」（使徒 14:6）にやってきました。この地方はローマ帝国に組み入れられてまだ日も浅く、ローマの文化が十分には行き渡っていませんでした。この地方の人々はローマの言葉であるラテン語や、当時の共通語であったギリシャ語ではなく、ルカオニヤ語という言葉を使う、小アジアの先住民、アナトリア人で、生けるまことの神を全く知らない人たちでした。神を知らない異邦人という点では日本人と同じでした。

ある時、パウロが人々に福音を語っていたとき、そこに生まれつき足の効かない人がいて、パウロの話を熱心に聞いていました。パウロはその人に信仰が芽生えたことを見抜き、大声で、「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言いました（8-10節）。すると、生まれてから一度も、自分の足で立つことも歩くこともできなかったこの人が、突然、飛び上がって、歩き出したのです。人々はこんなことを、今まで一度も見たことがありませんでした。それは現代の医学でも不可能です。もし、出来たとしても、長期間のリハビリテーションなしには出来ないことです。それが人々の目の前で一瞬にして起こったのです。この奇蹟は、神があわれみ深く、力あるお方であることを示し、パウロの伝えている福音が真実

なものであることを証しするものでしたが、この奇蹟を見た人々は、パウロの伝えていた神をあがめるどころか、ルカオニア語で「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ」叫び、「バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人であったので、パウロをヘルメスと呼び」ました。ゼウスはギリシャの神々の主神で、ヘルメスはその使者です。ルカオニアの町にはゼウスの神殿があったのですが、「ゼウス神殿の祭司は、雄牛数頭と花飾りを門の前に携えて来て、群衆といっしょに、いけにえをささげようとし」ました（11-13節）。バルナバとパウロは、そのことに驚き、それをやめさせようとして、こう言いました。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とそこにあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。」（15節）

ふたりが言った「むなしいこと」、あるいは「むなしいもの」というのは、偶像や偶像礼拝を指す聖書の言葉です。神は、あらゆるものを造られた造り主です。ところが、人類は、造り主である神をあがめることをしないで、造られたものにすぎない太陽、月、星、また、人間や動物などを神々としてあがめ、造られたものの姿を形に刻んでそれを礼拝するようになったのです。「むなしいもの」を礼拝するとき、人は自らがむなしいものになります。列王記第二 17:15 に「彼らは主のおきてと、彼ら

の先祖たちと結ばれた主の契約と、彼らに与えられた主の警告とをさげすみ、むなしいものに従って歩んだので、自分たちもむなしいものとなり、主が、ならってはならないと命じられた周囲の異邦人にならって歩んだ」とあります。イスラエルの人々はまことの神を知っていたのに、異邦人の道を歩んだのですが、異邦人はもとから、むなしいものに従い続けており、そして、そのことに気付いていないのです。

イエス・キリストを信じることは、まず、「天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返る」ことから始まります。使徒信条は「われは、天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と言ってから、「われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず」と言っています。そのように、神を、天地の造り主、唯一のまことの神と信じ、このお方に立ち返ること、つまり、神への悔い改めの上にイエス・キリストへの信仰が成り立つのです。パウロは、使徒 20:21 で、「ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張した」と言っています。また、テサロニケ第一 1:9-10 でも、こう言っています。「私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望

むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。」人は、「偶像」から「生けるまことの神」に立ち返り、それから、イエス・キリストを信じて救われるのです。

神が天地の造り主、生ける神であるとの信仰は、イエス・キリストを信じる信仰の基礎です。このことがはっきりしていないと、イエス・キリストを受け入れるといっても、自分たちが今まで信じてきた神々に、もうひとつの神、キリストを加えるだけのものになってしまいます。私たちは、毎週、世界の国々のために祈っていますが、その祈りの課題の中に、「クリスチャンがアニミズムから解放されるように」というものが何度も出てきます。「アニミズム」というのは、さまざまな霊を信じる信仰で、日本の神道も同じです。「日本人は心に神道を根強く持っていて、その上に仏教を着、クリスチャンは、その上にさらにキリスト教という上着を着ている」と言われますが、もし、そうだとしたら、その信仰は本物の信仰ではありません。神道のアニミズムと「天地の造り主、全能の父なる神」を信じる信仰は相容れないものだからです。

神が天と地の造り主であることは、聖書が教えることですが、神は、聖書を持たなかった異邦人のためにも、大宇宙や自然界のさまざまなものを通して、その存在、知恵や力を証ししてこられました。科学が進んで自然界の成り立ちが分かるようになり、世界が神の知恵と力によって形作られていることがもっと分かるようになりま

した。聖書に「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」（詩篇 19:1）とある通りです。ダラスには ICR（Institute of Creation Research）という団体があって、創造の証拠を研究しており、小さいながらも、充実したミュージアムもあります。学ぶべきことが多くあり、神を知り、また、他の人に神のことを話すのにとっても役に立ちます。神がこの世界と、私の造り主であることを知ることによって、世界観、人生観が変わります。そこからイエス・キリストの救いへと導かれていきます。

バルナバとパウロは、このように、ルステラで、生ける、まことの神を証しました。そして、ギリシャの神々をはじめ、偶像礼拝をしていた人々が生けるまことの神に立ち返り、イエス・キリストを信じる者へと変えられていきました。同じ神のみわざが、今、この時、ここで行われますように。人々は、パンデミックによって、不安と孤独の中にあります。ほんものの平安と救いは、生けるまことの神にしかありません。多くの人が神を求め、イエス・キリストの救いを受けるよう、なおも、祈り励みましょう。

### （祈り）

天地の造り主、イエス・キリストの父なる神さま、あなたの知恵と力に信頼します。人を救うあなたのみわざは今も変わりません。この時、ひとりでも多くの人が、正しい信仰へと導かれ、その人生が幸いで満たされますように。イエスのお名前です。

## 証しされた福音

使徒 15:1-2

15:1 さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。」と教えていた。

15:2 そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。

ヴァージニアにアン・ジャーヴィスという人がいました。南北戦争（1861-65）のとき、ヴァージニアは南部連合に属していました。彼女は母親たちのクラブを作り、敵味方なく、兵士たちを助け、戦後、南北の和解のために働きました。またグラフトンの教会の建設にもかかわり、その教会のサンデースクールで25年の間、子どもたちを教えました。ジャーヴィスさんは、夫の死後、娘のアンナさんが住んでいたフィラデルフィアに移り、1905年にそこで亡くなりました。それから2年経って、アンナさんは、母親の記念会をヴァージニアのグラフトンの教会で行いました。その時のアンナさんのスピーチに感銘を受けた人たちが、翌年「母の日礼拝」を行い、それが、今日の「母の日」となりました。母の日は、母を通して私たちに愛を注いでおられる神への礼拝から始まったものでした。

### 一、証の力

私がカリフォルニアで奉仕していた教会では、若い母

親たちが大勢教会に来ていました。ソーシャル・ホールには何台ものストローラが並ぶほどでした。母の日ともなると、もっと大勢の若い母親たちが集まりました。母の日は、ほんとうは自分の母親を覚えて感謝する日なのですが、いつしか、母親である人が、「私の日」のようにして、自分が主人公であるかのようにして、母の日の集まりに来るようになりました。そんな中で、バプテスマを受けたばかりのひとりの姉妹が、寂しい思いをしていました。というのは、その姉妹は、結婚して何年も経つのに子どもが与えられなかったからでした。彼女は、後になって、「その時は、赤ちゃんを連れて教会に来る人を、うらやましく思っていました」と、正直に話してくれました。彼女は、親しくしている人たちと一緒に子どもが与えられるように、まだクリスチャンでない夫も救われるようにと祈り始めました。

神はその祈りを聞いてくださいました。まず、彼女の夫が教会に来るようになり、彼は、間もなくしてイエス・キリストを信じて、救われたのです。そして、それから彼女に子どもが与えられました。神は、生まれてくる子どもが、クリスチャンの両親によって育てられるという祝福を受けるよう、とりはからってくださいましたのです。私たちは、彼女の夫が救われ、子どもが与えられるという二重の祝福を目の当たりにしました。旧約時代にハンナの祈りに答えてくださった神は生きておられることを、改めて確信しました。

聖書は、神がすべてのものを創造され、生きる者すべ

てに命を与えておられることを教えています。私たちは、造られたものの中で、人間が、他の動物とは違う特別な存在であることを知っています。人間には、環境に合わせて生きるだけでなく、環境を変えて生きる「知恵」が与えられています。また、自分を客観的に見ることが出来る「良心」を持っています。さらに、たとえ自分は辛くても、正しいことや他の人のために尽くす「愛」を知っています。これは、聖書が教えるとおりに、神が人をご自分に向けて造ってくださったからです。人間は、神に造られた被造物のひとつで、決して「神」ではありませんが、神に似せて、「神のかたち」に造られたものなのです。私は、聖書の勉強を始めたとき、詩篇139:13の「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです」という言葉を読んで、神が、ひとりひとりを、存在の始まりから心にかけておられることを知って、とても感動しました。

知識は「力」です。神の言葉、聖書によって神を知ることによって人は力を得ます。しかし、さきほどの姉妹のような証に触れると、聖書の知識が、心に入り、それを確信することができるようになります。牧師は、聖書から説教します。それを聞く信徒は、聞いたことを実行し、神の祝福を体験します。そして、それを証しします。人々は、その証しによって、信仰に導かれます。私は、奉仕したどの教会でも、次々に人々が救われていくのを見てきました。毎年、多くの人々がバプテスマを受け、信仰を成長させ、教会の奉仕を担ってくれました。

さきほど触れた姉妹の夫は執事となって良い奉仕をするようになりました。それは、牧師の説教だけで出来たことではありません。説教を真剣に受け止め、それを実行して、神の祝福を体験した人たちが、それを証したから出来たことでした。神は、牧師の説教と信徒の証、この二つを用いて、人々を救いへと導いてくださるのです。

この「証の力」はきょうの箇所にも見ることができます。使徒 15 章には、初代教会が異邦人伝道に乗り出したときに起こった教理的な問題が書かれているのですが、その問題を解決したのは、聖書の教えとともに、実際の証だったのです。

## 二、割礼問題

その問題は、ある人々が、アンテオケ教会にやってきて、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えたことから生じました（1 節）。「割礼を受ける」というのは、ユダヤ人と同じようになることを意味します。それは「割礼」を受けるだけにとどまらず、ユダヤ人に課せられたさまざまな律法に従うということでした。「人は、イエス・キリストを信じることによって、イエス・キリストの恵みのゆえに救われる。」これが福音の教えです。使徒 13:38-39 で、パウロはこう説教しました。「ですから、兄弟たち。あなたがたに罪の赦しが宣べられているのはこの方によるということを、よく知っておいてください。モーセの律法によつては解放されることのできなかつたすべ

ての点について、信じる者はみな、この方によって、解放されるのです。」人が罪の刑罰、罪の負債、罪の重荷から解放されるのは、律法を守ることによってではなく、イエス・キリストを信じることによってなのです。

ところが、「ユダヤ主義者」、あるいは「律法主義者」と呼ばれる人たちは、異邦人キリスト者に、「信仰だけでは救われない。あなたがたも、割礼を受け、ユダヤ人が守っているさまざまな戒律を守らなければならない」と教えたのです。ユダヤの人々が割礼を受け、ユダヤ人の生活律法を守るのは、それによって救われようとしないう限りは、問題はありません。しかし、異邦人にそれを要求するのは間違っています。信仰だけでは不十分で、律法を守らなければ救われないとするのは、結局のところ自分の力で自分を救うことになり、キリストの救いの恵みを無益なものにしてしまうことになるのです。

パウロとバルナバは、そうした教えに立ち向かいました。2節に「そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じた」とありますが、「慰めの子」と呼ばれた柔和なバルナバでさえ、議論に加わりました。問題が、形式や表現の違いだけのことなら、バルナバはそんなに激しく議論しなかったでしょう。むしろ、互いに受け入れあうように勧めたことでしょう。しかし、この問題は信仰の本質や福音の真理に関わることで、決して妥協することのできないものでした。私たちは、本質的なものを見抜けないで、間違った教えを受け入れてしまっているのに、周辺的なものにこだわって、

どうでもよいことを議論することがあります。そうならないように、絶えず聖霊の知恵を求め、本質的なものと周辺のものを見分けることができる理解力を持っていると思います。

### 三、問題の解決

パウロとバルナバは、この問題を使徒たちや長老たちと話し合うため、エルサレムに行きました。エルサレムにも、「異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである」という人がいて（5節）、そこでも激しい論争がありました。

論争の最中、ペテロが立ち上がって、カイザリヤでコルネリオが救われた時のことを証しして、こう話しました。「兄弟たち。ご存じのとおり、神は初めのころ、あなたがたの間で事をお決めになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされたのです。そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの先祖も私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。」（7-11節）すると、「全会衆は沈黙して」しまいました。言葉の応酬だけの議論は果てしなく続きます。しかし、神が、実際にしてくださった

ことの証は議論に決着をつけます。ペテロの証は、「論より証拠」で、議論を結論に導いたのです。バルナバとパウロもペテロの証に加えて、伝道旅行で神がくださったさまざまな出来事を語りました。最初に申し上げたように、「証には力がある」のです。

最後に、議長役のヤコブが、「神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません」と言って、「異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである」という意見を退けました。そして、この会議の決議文を諸教会に送ることになりました。その決議文の内容は23-29節にある通りです。結論の部分にはこう書かれています。「聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷も負わせないことを決めました。すなわち、偶像に供えた物と、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けることです。これらのことを注意深く避けていれば、それで結構です。以上。」(28-29節)非常に簡潔で的を得たものです。異邦人クリスチャンは、この決議文を歓迎し、それを喜びました(30節)。

この問題は、これで決着がついたかに見えましたが、割礼を主張する人たちは、その後も、しつこく活動しました。パウロはこのあと、2回目の伝道旅行に出かけ、以前バルナバと一緒に伝道したピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベに、もう一度行きました。こうした町がある地域は「ガラテヤ」と呼ばれていました。パウロは、それから、アジアを離れてギリシャに向

かい、コリントまで行くのですが、コリント滞在中に、ガラテヤの町の人たちまでも「ユダヤ主義」や「律法主義」に傾いてしまったという知らせを受けました。パウロは心を痛めて、ガラテヤの諸教会に手紙を書き送りました。それが、「ガラテヤ人への手紙」です。

パウロはその中でこう言いました。「よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。割礼を受けるすべての人に、私は再びあかしします。その人は律法の全体を行なう義務があります。律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。」（ガラテヤ 5:2-4）ガラテヤ人への手紙では、人が救われるのは律法の行いによってではなく、福音を聞いて信じることによってであること、つまり、人間の力によってではなく、聖霊の働きによってであることが、言葉を尽くして書かれています。

初代教会にあったこの問題は、歴史を通して、形を変えて表れてきました。4世紀には「アリウス主義」というものが起こりました。イエス・キリストは神ではなく、最高の人間であったため神の子とされたとする説です。それは、イエスは人類のお手本であり、イエスに倣い、イエスのように生きることによって、人は救われると教えます。もしそうなら、人は、信仰によってではなく、行いで救われるということになります。それは、「律法主義」と同じです。自由主義神学やエホバの証人、モル

モン教会などは、現代版のアリウス主義です。パウロやバルナバが守ろうとした福音の真理は、教会がはじまった最初の時から常に挑戦を受けてきました。福音に敵対する人たちは、イエス・キリストを否定しません。もしそうなら誰も耳を傾けないでしょう。ところが、彼らは聖書が教え、使徒たちが証ししたイエス・キリストではなく、自分たちの都合のよいように作り変えたキリストを教えるのです。そして、神の恵みだけでは不十分で、そこに人間の側で果たす何かの功績を加えなければならないと言うのです。しかし、真実な信仰者は、救いはイエス・キリストの恵みによることを知り、そのことを証しし続けてきました。ジョン・ニュートンが *Amazing Grace* で歌っている通りです。「私は、ただ神の恵みによって救われた。」私たちも、この恵みを証しし、人々に届けたいと思います。

### (祈り)

恵み深い神さま、私たちが救われたのは、ただイエス・キリストの恵みによってです。私たちにこの恵みの豊かさをさらに体験させてください。この恵みを証しして、人々に福音を分かち合うことができるよう、助け、導いてください。キリストのお名前です。

## ひとりのために 使徒 15:36-41

15:36 幾日かたって後、パウロはバルナバにこう言った。「先に主のことばを伝えたすべての町々の兄弟たちのところに、またたずねて行って、どうしているか見て来ようではありませんか。」

15:37 ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。

15:38 しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよいと考えた。

15:39 そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行った。

15:40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。

15:41 そして、シリヤおよびキリキヤを通り、諸教会を力づけた。

### 一、マルコをめぐる意見の違い

パウロとバルナバは、先に、キプロス島や、ピシデヤ、イコニオム、ルステラ、デルベといった町で伝道しました。この伝道旅行から帰ってみると、ある人々がアンテオケで、「異邦人キリスト者もユダヤ人と同じ戒律を守らなければならない」と教えていました。それで、ふたりはこの問題について議論するため、エルサレムに上りました。この問題の解決を見たふたりは、アンテオケに戻り、以前のように教会で教えていましたが、しばらくしてから、パウロがバルナバに、二回目の伝道旅行に行こうと声をかけました。ところが、このとき、パウ

ロとバルナバの間に意見の違いが生じたのです。

それは、この伝道旅行にマルコを連れていくかどうかということでした。マルコは、第一回目の伝道旅行に助手として加わりました（使徒 13:5）。ところが、マルコは、パンフリヤで伝道チームから離れ、ひとりでエルサレムに帰ってしまいました（13:13）。パウロは「パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよい」（38節）と主張しましたが、バルナバはマルコを連れていきたいと主張しました。普段は柔和なバルナバでしたが、この時はパウロに譲りませんでした。また、パウロも、バルナバを尊敬してはいても、自分の意見を引っ込めませんでした。そのため、ふたりの意見が食い違ったのです。

聖書は正直に、初代教会で起こった不祥事やトラブル、論争を書いています。そうしたことを隠して、教会を美しく描こうとはしていません。教会には問題や論争、意見の相違、衝突がありました。しかし、教会はそれらを乗り越えて前進しました。そして、問題の解決と前進は、常に、神からの使命への従順と、相互の愛によってなされてきました。

39節に「激しい反目」と訳された言葉があります。この言葉だけをとりあげると、パウロとバルナバが、意見の違いから、互いに対立しあつたように思われますが、もとの言葉には、「対立」や「敵対」という意味はありません。同じ言葉が、ヘブル 10:24にも使われています。

そこでは「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか」とあって、「促す」と訳されています。「愛と善行が目に見える形で表される」こと、「ものごとをはっきりと表す」という意味で使われています。ですから、39節は、パウロとバルナバの意見の違いが明らかになったことを言っているだけです。パウロとバルナバは、互いを認めあって、それぞれ別行動をとることになりました。このことによって、伝道チームが二つに増え、伝道の機会が広がったのです。このことは、問題解決のヒントがあると思われま

## 二、マルコへの愛

さて、バルナバがパウロに譲らなかったのは、それがマルコに関することだったからでした。もし、自分のことであれば、バルナバは進んでパウロに譲つたろうと思います。マルコはバルナバのいとこでしたが、バルナバは、肉親の情愛というだけでなく、指導者として、マルコが持っていた善いものを見抜き、マルコが将来、主のお役に立つ働き人になることを知っていました。それで、バルナバは、マルコにチャンスを与え、前回の失敗を償わせ、マルコを鍛えたいと思ったのでしょう。

バルナバ自身はパウロと行動を共にしたかたも

一人ひとりを愛してくださる神の愛を深く理解する人だったからだと思います。

「ひとりみんなのために。みんなはひとりのために」（One for all; all for one）という言葉があります。チームワークを表すのに使われる言葉で、一人ひとは全体のことを考えて行動し、全体は一人ひとりを大切に扱うという意味です。いい言葉ですが、実行するのは簡単ではありません。「ひとりみんなのために」が悪用されると、全体が良くなればいいので、そのためには、役に立たない者や違った意見を持つ者は、切り捨てられてもしょうがないという「全体主義」になってしまいます。ギリシャの哲学者の中には、優秀な人間だけで国家を作ればよいと考えた人もありました。ローマの軍人たちの間には、弱いからだで生まれた子どもは、殺してしまってもよいというきまりがありました。ナチスが支配したドイツでは、戦争中、障害を持った子どもたちは疎開させられることなく、空襲を受ける都市に置き去りにされました。

今日では一人ひとりの権利が尊重されるようになり、「社会保障」という考え方が生まれ、ヨーロッパやアメリカでは「みんながひとりのために」を目指す社会が作られつつあります。しかし、実際は、一人ひとりの人格がほんとうに大切にされているかといえば、そうともいえない面もあります。どの国、どの社会でも、残念なことですが、弱い立場にある人たちがいじめられ、差別され、斥けられるという現実があります。そして、差別を

受けた人がもっと弱い人を差別したり、自分たちを差別してきた人々を逆差別したりします。差別に差別を返しても決して物事は解決しません。法律や制度を変えても、人の心まで変えることはできません。一人ひとりが尊重され、大切にされるためには、神が、私たち一人ひとりに目を注ぎ、心にかけて、愛しておられることを知り、信じ、その愛を受けることなしにはできないのです。

詩篇 22:9-10 に「しかし、あなたは私を母の胎から取り出した方。母の乳房に抛り頼ませた方。生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です」とあり、詩篇 139:13,16 には「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。…あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに」とあります。神は、私たち一人ひとりを、その存在の初めから知り、守り、心にかけておられます。また神は、私たちが年老いてもお見捨てになりません。イザヤ 64:4 で、神はこう言っておられます。「あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」

イエスは、この神の愛を実際に示してくださいました。イエスは犬勢の人々を教えるだけでなく、一人ひと

りの求めに答えてくださいました。イエスがガリラヤ湖を渡ってゲラサの地に行かれたのは、そこにいるひとりの人を、悪霊から解放するためでした（ルカ 8:22-39）。イエスはたったひとりのために丸一日を費やされたのです。また、ひとりの女性が癒やされたい一心でイエスの衣の房に触ったとき、イエスはその人が名乗り出るのを待ちました。彼女が確かに癒やされたことを人々の前で宣言し、彼女を社会に復帰させるためでした（同 8:43-48）。当時、ある種の病気を持った人たちは、社会から疎外されていたからです。イエスは彼女のからだを治すことだけでなく、完全な癒しを彼女にお与えになったのです。

ルカ 15:4-7に「失われた羊」の譬があります。羊飼いは、99匹の羊を置いて、いなくなった一匹を懸命に捜し求めました。この羊飼いは、「失われた羊」である私たちを捜し求め、神の牧場に連れ戻そうとしておられる、まことの羊飼いであるイエスご自身を指しています。

銀河系には1000兆の星があり、宇宙には銀河系のような星の集まりが数千億もあると言われていています。全宇宙の星の数は、ゼロが26個もつくような大きな数になります。神はそれらすべてを造り、治めておられます。この偉大が神が、その中の小さな星のひとつ地球に目を留め、そこに住む80億の人を心にかけてくださっているのです。いや、神はその一人ひとりを「80億分の一」として扱うことなく、地球上で、たったひとりの人であるかのようにして、かけがえのない存在として愛してくだ

さっているのです。

この事が分かったら、私たちは誰ひとり、他の人をうらやんだり、劣等感に陥ったりすることが無くなります。また、間違った優越感をもって他の人を見下すようなことも無くなります。健全なセルフ・エスティームを持つことができるのです。

マルコは、自分のことで叔父のバルナバがパウロと行動を共にすることができなくなったことを心苦しく思ったかもしれません。しかし、マルコはバルナバを通して、自分を愛してくださる神の愛を知ったことでしょう。そして、その愛を知ることによって、バルナバの期待に、また、神の期待に答える働きをすることができたのです。

### 三、マルコのその後

使徒の働きには、この後、マルコの名前は出てきませんが、およそ10年後、マルコはパウロから「私の同労者」と呼ばれています（ピレモン 1:24）。パウロは、第三回目の伝道旅行を終えて、エルサレムに上ったとき、そこで捕まえられました。ローマ市民であったパウロは、市民としての安全と自由を求めてローマに訴えました。そのため、パウロはローマに送られ、ローマで獄中にいました。獄中といっても、外出は許されませんでした。多くの人がパウロのところに來、またパウロのもとから遣わされていきましたが、マルコもその中のひとりでした。コロサイ 4:10に「私といっしょに囚人となっているアリス

タルコが、あなたがたによろしくと言っています。バルナバのいとこであるマルコも同じです。この人については、もし彼があなたがたのところに行ったなら、歓迎するようにという指示をあなたがたは受けています」とあるように、マルコはパウロによって、コロサイに遣わされています。かつて、パウロから伝道旅行に参加することを許されなかったマルコが、今は大きく成長して使徒の代理人として派遣されるまでになったのです。テモテ第二 4:11 には、「マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです」と書かれています。マルコは、パウロの第一回目の伝道旅行のとき、途中でそこから離れるという失敗を犯しましたが、失敗したままではありませんでした。失敗から学びました。そして、パウロから「役に立つ人」として信頼されるまでになりました。

マルコはペテロからも信頼され、ペテロ第一 5:13 では、ペテロから「私の子マルコ」と呼ばれています。マルコが書いた福音書は、ペテロが語ったことに基づいていると言われていますが、ペテロは、マルコを信頼して、彼に福音書を書くという役目を任せたのです。福音書の著者を英語でエヴァンジェリストと言い、それは「伝道者」という意味でもあるのですが、マルコは、四人のエヴァンジェリストの最初の一人となり、また、各地で福音を伝える伝道者としても活躍しました。

神は、ひとりの青年マルコを心に留め、バルナバやパウロ、また、ペテロという使徒たちを通して、伝道者マ

ルコとして育ててくださったのです。同じ神が、私たちを、また、将来ある若い人たちを育て、導いてくださっています。一人ひとりが、神の愛を知り、愛の神に答え、それぞれに自分にできることで神のために働き、また生きる有意義な人生を送ることができるようにと、心から祈ります。

### (祈り)

私たち一人ひとりを愛してくださる父なる神さま。聖書はあなたの愛の言葉で満ちています。イエスはその愛をあますところなく、私たちに示してくださいました。主に従った使徒たちはその愛を実践しました。マルコのこと、パウロとバルナバが別々に伝道旅行に出かけるようになったことが書かれた部分からも、あなたの愛を感じ取ることができ、感謝します。この週も、聖霊によって注がれているあなたの愛を受けながら歩む私たちとしてください。主イエスのお名前です。

詩篇 19 篇は、1 節で「天は神の栄光を語り告げ…」と言って、自然界に表された「声なき声」である「神のことば」のことを語っています。この「ことば」はヘブル 11:3 で「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り…」と言われ、ヨハネ 1:1-3 で「初めに、ことばがあった。…すべてのものは、この方によって造られた」と言われていることに通じるものです。「神のことばが天地を造り、それを支えている」のです。

それで詩篇 19 篇は、陽の光がすべてのものを照らし、暖め、生かすように、神のことばがすべての人を生かすと言うのです（7-10 節）。人は神のことばによってのみ、戒めを受け、罪から救われ、神に喜ばれる者になることができます（11-14 節）。

日本は「言霊（ことだま）の幸ふ国」（『万葉集』）と言われ、人々は言葉の持つ力を知っています。神道の祝詞（のりと）や仏教の声明（しょうみょう）などは、明瞭に声に出して語られた言葉には命があり、力があるという考えから来ています。人の言葉でさえ、そうなら神の言葉には、もっと大きな力があります。聖書を学びそれを理解することは大切なことですが、それ以前に、聖書を朗読すること、声に出して唱えることも忘れてはならないことです。



**Penguin Club**

[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)